

アメリカンフォークロアと英雄像（Ⅱ）

American Folklore And Heroic Legends（Ⅱ）
-as A Symbol of American Aspirations and Identity-

加藤 英夫

桐蔭横浜大学法学部

2005年9月15日 受理

1. はじめに

アメリカンフォークロアの概観と特徴については論文（Ⅰ）で論じてきた。（Ⅱ）ではアメリカ民衆の理想と精神が具現化された民話の英雄について述べる訳だが、それは植民地時代、開拓時代を通して培われたアメリカの特質を示している姿でもある。背景には新世界アメリカ特有のエスニック文化、つまり白人を軸に黒人、ネイティブアメリカン、そしてヒスパニックも交えた混合文化がある。フォークロアの世界ではエスニック混合文化が融合してる感もあるが、それぞれの人種的アイデンティティは失われていないといえる。

フォークロアのスタイルは多様である。文学と民話の接点からは例えば Washington Irving(1783～1859)の Rip Van Winkle は作品の原点はドイツ民話にあると云われるが、それは独立戦争を体験しアメリカ社会の急速な変化を敏感に察知し、逆説と警鐘を込めながら民話を素材とし完成させたアメリカ文学の古典である。ほら話 (tall tale)、作り話 (yarn) はフォークロアの重要な一部である。

ほら話の持ち味は虚構性と共に現実をベースに含む点にある。西部（中西部、南西部）で育ったほら話はアメリカ西部開拓史と無縁ではない。厳しい、困難な生活を癒してくれる心の糧として、面白おかしい話を求め、又生まれてくのは自然である。それはアメリカ民衆の生活から生まれた精神の具現なのである。代表的な作家としては Mark Twain(1835～1910) が挙げられよう。民話との関連では短い原話を材料とした短篇 *The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County* 「とび蛙」が出世作でもあり注目したい。

アメリカ大陸の辺境線がカルフォルニアに達し、19世紀末にアメリカ大陸のフロンティアが終焉する頃に木こりの英雄ポール・パニヤン (Paul Bunyan) が誕生している。同時に鉄道に関連した機関手の英雄ケーシー・ジョーンズ (Casey Jones)、更に鉄道建設で働く工夫達の中から誕生した黒人の英雄ジョン・ヘンリー (John Henry) も多くの人々に語られるようになった。彼等は miracle men とよばれる伝説的英雄群に入ると思われる。

実在の人物で backwoods booster (辺境のほら吹き) と称されるデイビー・クロケット (Davy Crockett) にまつわる話は多々あ

る。彼の多彩な履歴とアラモの砦での悲劇的な最後こそがアメリカの人々にとってユーモアの伝説的な英雄としていつまでも語られている理由であろう。又南北戦争 (1861 ~ 65) では敗者である南部が伝説の誕生に貢献している。そこでは killers が単なる殺戮者として終えるのではない。伝説的な英雄像として歌謡、民話を通して伝えられている。南北戦争の落とし子としてジェシー・ジェームス (Jesse James) は見逃せない。さらに無法者としては歴史上悪名高いビリー・ザ・キッド (Billy the Kid) が実像とは乖離して次第に民衆の心を引きつけ、アメリカのロビン・フッドのごとく美化された。ジェッシー・ジェームスが仲間から背後から射殺され、ビリーは宿命の相手保安官パット・ギャレット (Pat Giarret) に若くして射殺されたように、いずれも悲劇的な最後で人生の幕を下ろした辺りが、通説の如く伝説化された民衆の英雄像の背後にある根柢である。

アメリカンフォークロアに登場するヒーローの数はアメリカ民俗学会会長でもあった B.A.Botokin 氏が編纂した *A Treasury of American Folklore* (1979) をみても膨大である。例えば上記の他にも魔女 (witch) や信仰に関する話、多くの幽霊 (ghost) の話等、フォーク・テイルズは数に枚挙の遑がない。論文 (Ⅱ) では上記に紹介した一部分を考察して論ずることにするが、フォークロアの重要な点は民衆の精神が過去、現在、未来へと継承する普遍的価値があるということで、部分から共通の価値を引き出しアメリカ文化の一端を理解しようと試みるものである。

(2)

アメリカ現代文学の原点とアーネスト・ヘミングウェイに高く評価された代表作 *The Adventures of Huckleberry Finn* (1884) を含め、アメリカの特質を存分に含んだ数多くの著作で有名なマーク・トゥエインの短篇ではあるが民話を材料とした出世作と云われる

The Celebrated Jumping Frog of Calaveras (その名も高き跳び蛙) を考察してみたい。

本名を Samuel L.Clemens というトゥエインは 12 歳で印刷工の見習いからジャーナリスト、水先案内人と職を転じながら、やがてマーテマス・ウードという作家と出会い、ユーモアの手法を体得していくのである。生き生きとした生の俗語、方言を駆使する手法は、彼の生まれがミシシッピ川の西であり開拓者達の中で育ったことで民衆の口語、俗語を熟知したことから体得されたといえる。同時に彼の優れた文学的才能は基盤として不可欠なものであろう。

短篇「その名も高き跳び蛙」の民話に類する素材は前述のごと更に短い *The Jumping Frog* というトリックスター話である。トゥエインはこの原話をロス・クーンという老人から耳で聴き、訛りを含んだ語り調子を失わない手法で生き生きとした作品に仕立て上げ、当時の *New York Evening Post* を通して全米に紹介されたものである。プロットの核は主人公 Jim Smily が一匹の蛙にジャンプの訓練をし：

Smily was monstrous proud of of his frog....all said he laid over any frog that they see.

と述べられているように、想像をこえたほら話の世界を想起させるジャンプ力を身に付けた蛙に育て、負け知らずの賭けをするのである。ところが見知らぬ男から；

.....the feller took it, and looked at it careful....."H'm So 'tis. Well, what's *he* good for?"

と揶揄されたことでスマイリーの賭け心に火がついてしまったのだ。彼の慢心と対象的に相手の男はトリッキーで冷静であるところが面白い。蛙の口にうずら撃ち用のザラ弾丸 (quail shot) を詰め込んでまんまと賭けに勝ってしまうのである。このプロットに文中の語句を借りれば winning gentleness and simplicity と魅力的な程に物柔らかで、朴訥な印象を与える Simon Wheeler という語り

べ老人の話し方が民話的な肉付けをしている。更に比喩、皮肉の要素は著名な実在人物の名前を例えば bull-pup について；

....you'd think he wa'nt worth....look ornery....But as soon as money was up him he was a different dog.....

Andrew Jackson—which was the name of the pup.....

とアメリカの将軍としても活躍し、第7代大統領でもあるアンドリュー・ジャクソンが登場する。金が賭かれば別人のような犬になるとは、読者は愉快的気分になろう。更にスマイリーの蛙の名前は政治家にして雄弁家 Daniel Webster と同一である。蛙のジャンプ力を誇張し、その力も騙されて失う喩えとして考えてもいいのではないか。又蛙のジャンプ競争の賭けを文明と辺境の対立とする解釈もあるが、文中：

Smiley said all of a frog wanted was education, and he could do 'most anything.

とあり教育すれば何事もまず思うようにいくと述べられている。教育された蛙ダニエル (Dan'l) は文明の象徴、対戦相手の蛙はスマイリーが適当に探し当てた辺境のそれ、とすれば当時の民衆も興味を抱く対照性が生まれる。誇張すればアメリカの荒野と文明という歴史的テーマにも敷衍されることも可能である。

この短篇は確かにサイモン・ホイラーの語る力強さに魅力を感じる点に魅力があろうが、長々とせず要点を纏めたことでトゥエイン流の話し方定義の面白く、機知に富んだ文学的手腕の結実であるといえる。

(3)

勇猛果敢な人を英語で lionheart と表すが、アメリカ人のみならず耳に触れたはずである。古くアメリカでは「西部のライオン」(The Lion of the West) (1831) というタイトルの戯曲は人気を博したが、そのモデルでもあり辺境に暮らす開拓者の理想的英雄像と

して Mike Fink 等以上にしられた人物こそ Davy Crockett (1786 ~ 1836) である。開拓の歴史はその生活から独特の生活と文化精神を生み出した。辺境の奥地で開拓の生活を営む人々 (backwoodsman) にとってスリルと冒険、絶望と夢等の交錯は必然であった。誇張したり作り話、ほら話の類は彼等の現実生活と表裏一体なのである。

ほら話の主人公であり語り手でもあったデイヴィ・クロケット (正式には David Crockett) はテネシー州生まれ Creek Indian War (1813 ~ 14) では斥候兵としてインディアン討伐に参加、その後テネシー州の州兵で大佐となり通称コーネル・クロケット (Colonel Crockett) とも呼ばれている。ほら話の名手として彼が民衆のヒーローへと伝説化していく契機は 1827 年下院選挙で当選し、国会へと足を踏み入れたことであろう。この出世プロセスは驚くには当たらない。治安判事、州議会議員と政治家への途は自然の流れである。しかしアパラチア山脈の西、辺境開拓地で育ったクロケットは、民話のイラストに数多く描かれているようにあらい熊の毛皮の帽子、鹿皮の服そして猟銃のいでたちといったイメージから推察できるように、東部出身者からみれば奇人、変人の類に映ったのは理解できよう。しかも彼の個性はマスコミの注目の的になり、新聞や雑誌を媒体とし更に口承、伝聞を通して次第に誇張され、皮肉や揶揄も含めて具象化されていった。彼はこのような辺境の奇人像に対し、自らの人生を語る自叙伝ともいえる *A Narrative of Davy Crockett* (1835) を出版している。内容も陰喩、諺等、が駆使されているのは結構なのだが、事実は不明として、教養もなく出版できる程の文章作成能力には疑問があるようで、相当の助力にあずかったらしい。たとえば州議会選挙のエピソードとして自らリタラシー (literacy) がなく、よって新聞なども読んだことがないとふざけた紹介をしている。演説では聴衆の前では言いたいことを忘れ、結局は喉を潤すために酒場へ聴衆を誘うのであ

る。皆河宗一氏のクロケット像の記述を引用すれば：

「いかさまの醜悪さはユーモアにくるまれて笑いとはされ、人をごまかす快感となる。国会議員選挙に出馬した際も…… 有権者たちにラム酒をおごるため、ヤンキー商人をペテンにかけ…… したたか者のヤンキーをペテンにかけた噂が広まり…… そういう男こそ国会へ送るにふさわしい…… ペテンを能力の証とみて、デイヴィは見事当選した(Coon Skin Trick)」。

政治たるものに疎く、司法（法律）の何たるかも知らない、と皮肉られたクロケットはほら話、ごまかし、ユーモアを駆使しながら民衆の心を捉えていったのである。当時、アメリカ中西部の開拓地、辺境での苦難に満ちた生活では、いんちき、ごまかし、いかさま、はったりの類は生活の知恵であり、ユーモアに転化していかざるを得ない環境であったといえる。

1835 から 56 年迄、雑誌 Crocket Almanac 「クロケット暦」が刊行されている。クロケットはテキサス共和国独立の軍に入り、やがてサンタ・アナ指揮官のメキシコ軍とアラモの砦で戦いで壮絶に戦死(1836)をしている。悲劇的な死は伝説、神格化の不可欠の要素であるから彼の死後「クロケット暦」の内容は超人的な内容に肥大していく。例えば、幼児の頃に 600 ポンドの甲羅がついて、バッファローのミルクで育ち、ウイスキーと熊肉で大人になっていくとか、又雄牛のように歩き、地震のように響く大声で、銃は百発百中等、英雄伝というよりも、冷静に観察すると喜劇的な世界へ入り込んでしまう。もっともこの超人的な面白さが人々にはたまらないものかもしれない。

選挙演説の際、自らが語った逸話 *Grinning the Bark off a Tree* でクロケットの笑いを覗いてみる：

The Colonel Crockett could avail himself.....the advantages which well applied satire ensures.....

は冒頭の英文である。選挙の競争相手は誰にでもにこにこ笑顔に向けて人をそらさぬ人物であった。そこでクロケット大佐は下線部のように対抗する手段として効果的な笑いのほら話を披露するのである。笑いの威力とは：

So, I thought I'd bring the lark down in the usual way, *by a grin*.

のように笑顔であらい熊（高い木の上にいることで lark に喩えている）を落としてしまうことである。ところがある晩、いくら笑顔をあらい熊にむけても落ちてこない：

I determined to have him - for I thought he must be a droll chap.....I found that what I had taken for one. was..... knot uo upon the branch..... I saw I *had grinned all the bark off*, and left the knot perfectly smooth, にやっと笑っていた相手は木のこぶであり、しかもこぶの皮を剥いで平にしてしまったというおちである。しかし選挙演説としてはおわりの部分：

Therefore. be wide awake-looksharp -and do not let him grin you out of your votes.

「私がにやりと笑うことで、皆さんの票をはぎ取られないように」という語りが聴衆を笑わせる今一つのおちである。このようなユーモアに富んだ逸話はアメリカの大統領をはじめ選挙立候補者の有権者むけ演説の手法として引き継がれているようである。

4

ミラクルメンとも言われる超人英雄伝説の一人は紛れもなくポール・バニアン(Paul Bunyan)であろう。メイン州からカリフォルニア州、さらに北部大森林地帯の樵(Lumberjack)達の産んだスーパージャイアンツでもある。余りにも多くの人達に伝承され、異なる地域性と住民気質等からであろうか、ポール・バニアン民話のバージョンは多様である。彼の起源についてはファークロア関係

の資料に色々と紹介されていて、例えばアイオワ州出身の作家 James Stevens によるとその人物は 1837 年にヴィクトリア女王に反抗し、やがて森林伐採の責任者になったと伝えられるポール・ブニヨン (Paul Bunyon) ではないかとしている。しかしミシシッピ出身のポール・ボノム (Paul Bonhomme) やボン・ジャン (Bon Jean) 等、多くの説があり真偽の程は明白ではない。ただ森林地帯で多く語られること、活字として 1914 年にミネソタ州のレッドリバー木材会社の宣伝用冊子に登場したこと、多くの説に伐採を含めた木材関連の共通項があること、を考慮すれば森林伐採に係わる樵達から、名前の由来を別にすれば生まれたことは有力である。「シカゴ詩集」(Chicago Poems) 等、で有名な民衆的な詩人カール・サンドバーク (Carl Sandburg) はポールについてつぎのように自問自答している：

Who made Paul Baunyan, Who gave him birth as a myth.....

Who fashioned him forth as apparition easing the hours of men amid axes and trees....He grew up in shanties, around the hot stove of winter.....

優れた理想的なランバージャックの英雄像は樵達のたむろする煙草の煙が満ち、笑いと冬の寒さに嫌悪する感覚の小屋の中で誕生したと述べられている。活字と無縁の世界ですでにポールの超人像は創造されていったのである。

ポール・バニアンが活躍する世界のスケールは大きく、彼の能力は無限に近い。伝承された民話の多くはとてつもない困難を彼が克服してくれるものである。話の一部を三例紹介してみる：

*The Pacific Ocean froze over.....

Paul Bunyan had long teams of oxen hauling regular white snow over from China.

* One year when it rained from

St.Patrick's Day till the Fourth of July....He dived into Lake Superior....and as the rain stopped, he explained "I turned the dam thing off "

*Two mosquitoes lighted on one of Paul Bunyan's oxen, killed it, at it....Paul sent Australia for special bumble bess to kill...he floated them down to the Gulf of Mexico.

青い雪 (Blue Snow) とよばれる寒波では太平洋を越え、長雨が続けばシュペリオール湖の栓を閉め、牛を丸ごと食い尽くす巨大な蚊をメキシコ湾にながしてしまう。民衆の苦難な現実と彼等の願いを叶えてくれるいわば救世主でもある。いかなる困難にも立ち向かい、ポジティブで楽観主義的イメージを彷彿させる不死身なポールをアメリカの精神とパワーと重ねることで現代アメリカの在り方に一脈通じる面もあると考えられよう。

次にミラクルな英雄として黒人ジョン・ヘンリー (John Henry) について述べてみたい。彼は当時国家的な事業でもあった鉄道建設で働く工夫達の中から生まれた反文明、自然、人間賛美の象徴ともいえる。ジョン・ヘンリーは民話の口承伝説やフォークソングには馴染み深い人物である。前東大教授の亀井俊介氏は著書「アメリカンヒーローの系譜」で日本研究家のゴードン・バーガー氏との対話を紹介している。彼が "John Henry was a little baby boy...." と口ずさみ、亀井氏の "いつ覚えたのですか" という問いに "子供の頃よく歌っていたんだ" と答えるものであるが、それはどれだけフォークソングとしてジョンがアメリカの人々に親しまれているかを教えてくれるのに十分なものであろう。

彼の伝説にもさまざまなバージョンが交錯しているが、モデルになった鑿岩工夫が存在したようでもある。カール・サンドバークは詩集の中で⁽¹⁾「ジョン・ヘンリーは背が高く筋骨たくましく、チサピーク = オハイオ鉄道の鋼鉄ドリル打ちに雇われたハンサムな黒人であった。.....彼の使うハンマーは他のドリル打ちが使うものよりはるかに大きく

重たかったといわれる」と伝説のモデル像について言及している。ちなみに彼の steel driving man としての超人的な技を英文を引用して紹介してみる：

*...John Henry could stand on two powder cans.... drive a drill straight up equally as fast as he could drive it straight down....

* He would drive ten long hours with a never turning stroke.

* He was the only man that could drive steel with two hammers, one in each hand. People came to see.....20 lb. hammers.....

二つの火薬缶に足をおいて、上下から同じ速さで稲妻の如くハンマーを駆使でき、10時間も変わらぬ打ち方でスチールを打てたり、又両手にそれぞれハンマーを持ち、ハンマーの重さは20ポンドというからジョンのスタントは超人的である。この大きな体と筋肉はここでもアメリカの力の象徴と理想にオーバーラップした国民的英雄像となっている。

ジョン・ヘンリーのエピソードに必ず描かれる場面がある。それは彼と蒸気ドリルの競争である。勝てば当時の金額で100ドルを手にすることができるのである。彼が試合を受けた根拠については、恋する女奴隷を自由にさせる賞金のため、蒸気ドリル（機械）の導入は人間主体の労働力の削減につながることで対抗するため、あるいは非情な機械と人間の闘い（機械文明に対する自然との闘い）等、批評は多様である。コンテストについては：

They were to drill 35 minutes. When the contest was over John Henry had drilled two holes 7 feet deep....The steam drill drilled one hole 9 feet...which...gave the prize to John.

という結果で彼が機械に勝る訳であるが、この競争の後に脳内出血で命を落とすことになる。比喩的には科学技術への抵抗と挑戦は人間の生命を失う対価を要する困難な問題であ

ること、逆説的には自然を象徴する人間性や尊厳を命より尊い教訓という文学的テーマもあることを添えておきたい。

あと一人は機関士の英雄 (locomotive engineer hero) であるケイシー・ジョーンズ (Casey Jones) について述べてみたい。民話に関する資料によると1928年に没後28回忌の行事が行われたとあるので19世紀後半辺りに登場し英雄像化したと推測できる。但し28という数字は偶然か、アメリカ流の悪戯かは明確ではないが4月30日にが命日であると並記されていることからふざけた内容ではないであろう。*RANDOM HOUSE DICTIONARY* には(1864-1900)と記載されていることで歴史上実在した人物がいたことは明瞭である。

ケイシー・ジョーンズについては日本の研究書でも触れているものは少なく、英文資料も不十分でB.A.Botokinが編纂した*A Treasury of American Folklore*より抜粋したCasey Jones, Engineerなるタイトルの英文を基に考察してみたい。その前に彼に関する研究資料の少なさはまず上記の伝説英雄と比較して国民的関心が低いこと、明白な列車大破という事故事実があり、架空の人物か否かという想像の交錯する余地に欠けていること、彼の伝承は主としてフォークソング、歌謡スタイルであり研究対象としては取り組み難し、といった所にあるのかもしれない。もっとも日本では古くNHKのラジオ番組で名前の記憶は定かでないが三木トリローとかいう人が日本語バージョンを手掛け“ぼくは特急の機関手で、云々...”と歌うのを耳にしたのは私だけでなく年配の諸兄には懐かしい御記憶であろう。種本はケイシー・ジョーンズのフォークバラッドなのである。

「機関士ケイシー・ジョーンズ」でジョーンズ夫人 (Mrs.Jones) はインタビューに応えて事故で殉職した彼のことはもちろん、彼の英雄物語オリジナル版といえる音楽と詩を創作し、アメリカ国内に広めたといわれるウォレス・ソンダース (Wallace Saunders) につい

でも思い出をかたっている。夫の人物像について：

"My husband's real name was John Luther Jones. ".....He was lovable boy 6 feet 4.5 inch in height.....he was in good humor and his Irish heart was as big as his body."

と、本名はジョン・ルーサー・ジョーンズであり、性格も良く、体も大きく、心も寛大なアイリッシュ系の白人であるとしている。本名ではなくケーシー・ジョーンズというニックネームについては彼が生まれたケンタッキー州の Cayce[keis] という街にちなんで、その辺りでは2音節で発音 ([keisi]-Casey) するため、ケーシーとなったようである。

鉄道関係者にあまねくその名を知らしめ、彼のトレードマークとしての汽笛の音には特徴があったと云われている。彼が民衆の英雄になる大きな要因は638号機関車(old No.638)の事故大破であろう。1928年4月29日雨の夜11時、ケーシーと相棒の釜焚(fireman) シム・ウエブはテネシー州メンフィス駅から638号機関車を運転して出発した。翌日午前4時頃途中の待避線(sidetrack)に長い貨物列車がいたが、後部を本線に残した状態で、ケーシーはエンジンを逆回転させて急ブレーキを試みたが間に合わずクラッシュ、機関車は大破してしまった、乗客は無事であったがケーシーは：

....thet found one hand on the whistle cord, the other on the air brake lever.

と、汽笛の紐を握ったまま落命していたのである。相棒のシム・ウエブによれば貨物列車の車掌に警告をするため最後まで汽笛を鳴らし続けた由、これが彼の悲劇的な最後の様子である。

この悲劇的な死と英雄的な行為が伝説まで高められたのは前述のウオレス・ソンダースの貢献によるものである。彼はケーシーの死を悼み、自ら音楽に哀悼の詩を添えてバラッドとして街の人達に歩きながら聴かせたといわれる。ある時音楽家(song writer)がこのバラッドを耳にし、リィフレインの部分にケ

ーシーの名前は残して歌詞を変え、フォークソングのバラッドとして世に発表したのである。フロンティアスピリットの象徴である鉄道の世界で、誇張、美化されたとはいえケーシー・ジョヘンズは民衆の英雄像として今も健在である。

5

アウトローでもある Killers (殺し屋) がやがて民衆の中で伝説的な英雄となる現象はアメリカ史の混乱と危機の時代を背景に多く誕生した。国を二分した南北戦争(1861～65)では敗者南部の一部残党兵士が戦後に無法者と化して略奪と殺戮を行った。又アメリカ開拓史上19世紀後半に開拓されたミシシッピー川以西のいわゆるウエスト、(ミドル、及びサウス、ウエストを含む)に入るモンタナ、ワイオミング、ネブラスカ、コロラド、ニューメキシコ、ミズーリー等のテリトリー(準州)では法律の整備、連邦機関の設置、裁判所について不十分であったこともあって、治安もままならない状況であった。例えば独自に自警団を組織し、連邦政府の許可なく絞首刑を含めた刑の執行をしていたモンタナ自警団はその名を知られている。そのような地域ではワイアット・アープ等、の保安官やジャック・スレートをはじめとする無法者が民衆の心に興味を抱かせる関心事であったようだ。多くの無法物の中から民間伝承として伝説的な英雄になった二人の人物がいる。一人は南北戦争に負けた南部びいきの人達の心情を代弁したともいえるジェシー・ジェームズ(Jesse James)、もう一人は Lincoln County War(リンカン・カウンティ・の闘い)で一躍名を売り、やがてニューメキシコのロビンフッドと美化された無法者ビリー・ザ・キッド(Billy the Kid)である。二人がきわめて卑劣な手口で悲劇的な最後を遂げたことも質は異なるが英雄伝説の仲間入りを果たした要因の一つであろう。ここではジェシー・ジェームズについて述べることにしたい。

ジェシー・ジェームズ(1847～82)は典型的な南北戦争の落とし子であり、部下のボブ・フォードに撃たれ命を断たれた事件ではカンザスシティ・ジャーナルをして「アメリカ歴史に登場した最大の盗賊」と言わしめた殺しも厭わない無法者である。彼はミズーリー州クレイ(Clay)郡で1847年に敬虔な両親の次男として生まれた。父親は教養豊かなバプティスト教会の牧師である。間もなく父親が亡くなり母親が再婚した相手の医者も彼を大切に育てたようである。彼が南北戦争に巻き込まれ、やがては無法者になる環境は家庭ではなく居住した地域の問題であろう。クレイ郡は地理的にカンザス州に隣接していたのである。当時アメリカの各州(準州を含めて)は奴隷州か非奴隷州になるかの選択で苦悩していた。ミズーリー州には南部から移った住民も多く黒人奴隷を所有している家も少なくなかった(ジェシーの家にも数人の黒人奴隷がいたようである)。カンザス州は連邦政府の奴隷廃止を唱える人々が多く、州境ではカンザスの過激な奴隷廃止論者が奴隷容認者を襲撃し殺傷する事件が多発し、摩擦が絶えなくなっていた。このBorder Warと呼ばれる紛争を当時9才のジェシーはよく話に聞かされていたようである。

このような時代の変革と地域の複雑な環境で育ったジェシーは北部派(the Union)への憎しみを抱くようになり、レキシントンの闘いで南軍(the Confederate)の部隊を指揮したカントリル(Quantrill)が自ら義勇兵を率いてゲリラ戦を展開すると、その義勇軍(group of irregular soldiers)に参加することになる。この時の戦闘体験で人を殺すことに慣れ、山深い抜け道を憶え、それが戦後の強盗や殺人そして追われて逃避するのに役立ったといえる。

やがてフランクとジェシーのジェームズ兄弟は強盗団を結成し、ミズーリーを中心に列車や銀行を襲撃、金品を強奪する悪行を重ねていく。しかし1876年を境として"Outlaw State"と皮肉られたミズーリー州知事がジェシ

ーに賞金を賭け、又彼等を追跡していた探偵アレン・ピンカー-tonが殺されたことで彼等は逃亡生活の途を歩むことになる。当時の様子がバラッドで次のように謡われている:

⁽²⁾Jesse James, Jesse James

He robbed banks, and he robbed trains
And the Pinkerton tried to hunt him down;

They followed him around from town to town

But they never laid a hand on Jesse James.

このバラッドや新聞記事を媒介として更にジェシーは人々の関心の的になっていったのである。カンザスシティに暫らく潜伏した後、聖ヨセフ(St. Joseph)という所の切り立った高台にある見晴らしのきく家に移った。そこは"adapted by nature for perilous and desperate calling of Jesse James"と喩えられ、ジェシーの人生と運命を象徴する場所であった。

1882年トマス・ハワード(Thomas Howard)の偽名で住んでいたこの家で悲劇的な最後を遂げる:

He(Jesse) picked up a dusting brush.....he got on a chair. His back was now turn to the brothers(Ford brothers).....Robert was the quicker of the two.....A nervous pressure on the trigger, a quick flash, sharp report...ball crashed through the outlaw's skull.

ロバート・フォードの一発は壁の絵に意識をとられ背中を向けていたジェシーの後頭部を貫いたのである。賞金欲しさからの部下の裏切りであった。彼の死を聞きつけた多くの群衆が彼の家を囲んでいたそうである。

死後、彼が民衆の義賊たる英雄として伝説化していった背景として幾つか考えられる。*Jesse James and the Civil War In Missouri*の著者Robert L.Dyerは⁽³⁾要点を的確に述べている。一つに、ミズーリーの住民は南部の大義を支持していたが、戦争に負けたこと

で北部への遺恨の念が高まり、その心情をジェームズ兄弟に転化したことである。併せて銀行や鉄道が北部の資本から成り立ち、それによって生じる金利、鉄道運賃の高さから北部支配に多くの人が良い感情を抱いていなかったことも背景にあらう。又ジェシーの死後多くの民俗学者やジャーナリストが彼を題材にした書物を出版したのだが、読者たる民衆の心を捉える内容にするため次第に事実が誇張され、美化されていったことも伝説的英雄像の十分な要素であらう。特に⁽⁴⁾John Newman Edwards の書 *Noted Guerrillas, or The Warfare of The Border* は人々に大きな影響を与えたようである。ここではジェシーをロビンフッドや円卓の騎士のように評し、ロマンチックな人物にしている。更にフォークソングに歌われ、アメリカのラジオや映画等、のマスメディアを通して偶像化された人物像が知れ渡ったことであらう。そして彼の場合も、部下に背後から射殺される卑劣で悲劇的な死が民衆に同情の念をかき立て、理想的なジェシーの世界を創りあげる役割を果たし、伝説化していく大きな要因でもあらう。今もアメリカのどこかで "Jesse James was a lad that killed many a man....." と歌声が聞こえているであらう。

されている。

主要参考文献

- (1) 「American Folklore」(1996) edited by J.H.Byunrand
- (2) 「A Treasury of American Folklore」(1999)edited by B.A.Botokin
- (3) 「Jesse James and the Civil War」written by R.L.Dyer
- (4) 「アメリカの民衆文化」F.P.コフィン著（大島良行訳）
- (5) 「アメリカ民話の世界」皆河宗一著
- (6) テキスト「An Invitation to American Folklore」（加藤英夫編）

註：

本文中の引用は、註（2）を除いてB.A. Botkin 編纂 A Treasury of American Folklore からの引用である。

但し、テキスト「American Folklore」（セントラルプレス）を引用に際し使用している。

- 註(1) 「アメリカ民話の世界」皆河宗一著 p.259 Carl Sandburg 著 An American Bag からの引用で皆河氏の訳文を借用している。
- 註(2) Robert L.Dyer 著 Jesse James and the Civil War Missouri p.58 このバラッドは著者による収集した中からの引用である。
- 註(3) lbib.p.66 英文の一部を和訳して借用している。
- 註(4) lbib.p.67 この本には Jesse James 以外にも多くのアウトローとよばれる人物が紹介